（第3種郵便物認可）　公明新聞

心肺蘇生へ利用促進めざす

取り組みの現状と課題を追う

自動体外式除細動器（AED）の使用が一般市民に解禁されてから、今年7月1日で丸10年。AEDの普及台数は53万台を超えた。12年の消防庁統計によると、救急搬送された心肺停止傷病者のうち、現場に居合わせた市民によってAEDを含む応急手当てが実施された割合は44・3%。実施率は毎年伸びているが、いまだ半数以上が、救急隊が到着するまで何も手当てされていないのが実情だ。心臓突然死が年間約7万人に達する今、救命現場でのAEDの活用などを促すにはどうすればいいのか。各地の取り組みを追うとともに、専門家に聞いた。

―関西支局・鷲岡秀明

致命的な〝何もしない〟減らす

AEDマップ活用し即座に対応　神戸市

通報を受けてから、救急車が現場に到着する所要時間は全国平均で8・3分。心停止の場合、居合わせた人が何もしなければ、致命的となる。だからこそ、「勇気を持って、心肺蘇生を行うことが大切なんです」。こう語るのは、神戸市消防局の巽俊一朗救急指導係長だ。

〝何もしない〟ことを減らそうと、神戸市が9年前から取り組んでいるのが、119番通報時のAEDマップの活用だ。公明党が推進しAEDが設置されている公共施設や学校、民間の商業施設などを「まちかど救急ステーション」として登録（現在、1884カ所）。

消防が119番通報を受けると、直ちに通報者の位置をAEDマップ上で特定し、最寄りのAEDの場所を「ビルの1階ロビーのエレベーター横」などと、分かりやすく伝えているのだ。もし、取りに行ける人がいない場合には、AEDの設置施設の責任者に連絡し、現場まで持って行ってもらう取り組みを行っている。まさに、一刻を争う救命現場での時間のロスを縮める工夫だ。

昨年7月には、マンションの管理人の男性が植木を手入れ中に倒れたとの通報を受けた消防は、このマンションの目の前にAEDが登録された高校があることを確認。すぐに同校の教諭に現場までAEDを届けてもらい、素早い連携で心停止状態だった男性の命は救われたという。

同市によると、ここ9年間で、市内にあるAEDによって除細動が行われた事例は340件。「このうち、約半数がまちかど救急ステーションのAEDが使われた」（同市消防局）

神戸市消防局の119番通報管制室。AEDマップに通報者の位置が表示される

神奈川県大和市では、古澤敏行市議㊐が推進し、全コンビニにAEDが設置されている

市内のコンビニ全86店舗に設置　神奈川・大和市

一方、24時間営業のコンビニエンスストアを、いつでも誰でも使えるAEDの拠点にしようという試みも広がっている。

全国で最も早かったのは静岡県三島市。次いで神奈川県大和市が、公明党の後押しで、2011年6月末から市内の全コンビニ（現在、86店舗）にAEDを配置。設置費用は市が全額負担し、店員は依頼があれば、AEDを貸し出す仕組みだ。これまで、テニスのプレー中に倒れた人に対して、テニススクールの指導者が近くのコンビニのAEDを借りてきて、専用のパッドを胸に張った段階で、意識が戻ったケースもあった。

また、人が多く集まる場所に効果的にAEDを置くことで、活用される機会を増やそうとしているのが、横浜市だ。同市では、09年4月に市の救急条例を改正し、一定規模（11階建て以上）の建物やスポーツ施設、民間のビルに対してAEDの設置を全国で初めて義務付けた。12年中に限っても、AEDによる除細動の実施が28件報告されている。

〝救命おぼえうた〟で手順の浸透進める　沖縄・那覇市

さらに、沖縄県那覇市では、シンガー・ソングライターの紀々さんが作った〝救命おぼえうた〟が話題に。「もしもその時　キミがいたら　勇気を出して　はじめよう！」「意識なければ応援呼ぼう　119番！　AED！」など、講習を受けても忘れがちな心肺蘇生の手順、心構えを誰もが口ずさめる童謡の曲に乗せて歌うものだ。

「印象に残る短いフレーズでいかに表現して、〝救命意識〟を高めるのか。これまで企業のCMソング作りを手掛けてきたノウハウが役立った」と語る紀々さん。TV番組でも紹介された〝救命おぼえうた〟は現在、「イベントや地域の集まりで活用したい」など、反響が絶えないという。子ども向けの救命講習会を主催するNPO団体から依頼を受け、紀々さんは胸部圧迫に特化した〝救命おぼえうた第2弾〟も作成中だ。

正しい認識が恐怖心取り除く　〝メンテナンス〟の義務化急げ

大阪医科大学准教授　西本 泰久氏に聞く

―AEDを使うのが怖いという人が多い。

西本泰久・大阪医科大学准教授　たとえ助からなかったとしても、心肺蘇生を行った人が罪に問われることはない。むしろ何もしなかった場合の方が問題だ。そもそも、AEDは電気ショックによる除細動が必要な人にしか働かないし、電気ショックが必要かどうかを診断する機械でもある。

こうした正しい認識を持ってもらうことが先入観や恐怖心を乗り越え、AEDの活用が一段と進むカギになる。

―救命講習を受ける意義は。

西本　形式的な講習ではなく、〝気持ちのスイッチ〟をどう入れるのかが大事だ。2011年9月に埼玉県の小学校で駅伝の練習中に亡くなった桐田明日香さんの事例では、救急隊が到着するまでの11分間、AEDを含めた救命処置が行われなかった。学校関係者は約2週間前、救命講習を受けていたにもかかわらず、誰も気持ちのスイッチが入らなかったのだ。人が突然倒れて、反応がなく、呼吸がおかしいと思ったら、とにかく胸を押すこと。迷ったら、とにかく心臓マッサージを優先的にやってみることだ。いざというときに役立つのは、シンプル・イズ・ベストな考え方だ。

―公明党をはじめ、政治に期待することは。

西本　まず、AEDのメンテナンスの問題だ。いざというときに、バッテリー切れでAEDが役立たなかったケースもある。消火器と違ってAEDにはメンテナンスの義務がない。これをどうするかだ。また、ネット上で公開している大阪府内のAEDマップは、NPO法人「大阪ライフサポート」が主導して作製し、日常的に更新もしているが、できれば全国的なAEDマップの整備をお願いしたい。

明新聞 (第3種郵便物認可) 2014年(平成26年)7月2日(水曜日) 日刊

自動体外式除細動器

AED解禁から10年

勇気の大切さ伝える教育を

大阪のNPO法人が主催

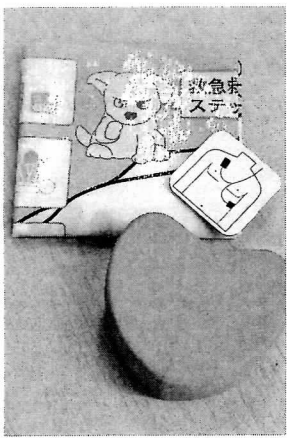
「そばにいるあなたにしか、助けられない命があります」。6月20日、JR大阪駅前の商業施設「グランフロント」のホールで開催された救命講習会で、前重奈緒さん(54)は参加者に切々と訴えた。

AEDが市民に解禁される1カ月前の2004年5月27日、当時17歳だった長男の響君を心臓突然死で亡くした前重さん。「あの時、AEDがあれば……」と何度思ったかしれないという。その後、夫婦して救急医療の勉強を重ねる中で、心臓マッサージとAEDの使い方を学ぶ救命講習会の輪を広げるNPO法人「大阪ライフサポート協会」(西本泰久理事長)の活動に賛同。自らの体験を語るメッセンジャーの役割を果たしてきた。

ライフサポートの講習会の特徴は、コール&プッシュだ。コールとは「119番通報とAEDの要請」。プッシュとは、突然、心停止になってしまった人の命を救うのは、胸骨圧迫(心臓マッサージ)とAEDの電気ショックによる除細動、そして、その場に居合わせた人の勇気であることを徹底的に強調することだ。

この日、講習会に集まったのは、若いOLから年配のサラリーマンまで、男女64人。2人1組になって、ハート型のトレーニングツール「あっぱくんライト」を上半身のイラストが描かれたビニールシートの心臓部分に置いて準備。前方のスクリーンに映し出されるアニメドラマ風のDVDによる説明に従い、倒れた人の発見、声掛けから始まり、意識の確認、心臓マッサージ、AEDの操作を次々と行っていった。

今回で4回目の参加という、グランフロントで働く阿部高明さん(53)は「年間500万人が訪れる大きな施設なので、いざというときに備えて、訓練を重ねています」と語った。



心肺蘇生のトレーニングツール「あっぱくんライト」

一命取り留めた女性――「恩返しを」と講習会に参加

兵庫県川西市から参加した森田多美子さん(54)は、一昨年の12月31日に、JR大阪環状線京橋駅のホームで心室細動を起こし、たまたま近くにいた看護師2人にAEDと心臓マッサージを受け、一命を取り留めたという。「1年が過ぎて何か恩返しをしたいと思ったときに、テレビ番組でこの救命講習を知った。とても勇気が必要だったが、参加してみて、私にも協力できることがあれば役に立ちたいと思っている」と話しながら、倒れた当時を思い出し涙を浮かべた。

救命率を上げるには、心臓マッサージとAEDのセットで取り組むこと。それには、〝一歩〟を踏み出す勇気と、いざというときのために、救命の手順を身に付けておくことだろう。

NPO法人「大阪ライフサポート協会」主催の救命講習会

心臓突然死で長男亡くし 必要性を訴え続ける母も

岸和田市消防署春木分署で救急係長を務める岡利次さん(46)は、救急救命士になって2年目の07年4月、岸和田市内の高校で野球の観戦中、胸に打球を受けて心停止になった高校球児を、胸部圧迫とAEDを使って奇跡的に救命した経験の持ち主。「たまたま休みで息子と一緒に野球観戦に来ていた時に、事故に遭遇した。『救命士です』と名乗り出て現場に立ったが、あの時の緊張感を今も忘れることはできない」と振り返る。

プロの救命士でさえ、仕事中以外で突然倒れた人に遭遇すれば極度のプレッシャーに見舞われるものだ。それを乗り越えられたのは、生還を必死に願う友達や親、監督など周囲の人の声掛けと協力だった。

「子どもたちに命の尊さ、勇気の大切さを教えていく息の長い教育を展開したい。目の前で人が倒れたら、応急手当てをするのが当たり前、AEDを使うのが当たり前の社会をつくりたい」と、総務省消防庁の鈴木真也救急企画室主査。日本のAEDの設置台数は、世界でも屈指といわれる今、救命への意識と技術の浸透が求められている。